

島 正博

(株)島精製作所社長

1937年●和歌山市生まれ
1956年●県立和歌山工業高校定時制を卒業
1962年●(株)島精製作所を設立
発明少年は現在600以上の特許の持ち主
同社製のコンピュータ制御横編み機は
世界シェア60%を超える。



Masahiro Shima

それは焼け跡の バラツクから始まった… 天才少年、世界を編む物語

お客様の要望を聞きながらデザイナーがコンピュータを操作、スタイルや柄が決まるとスタートボタンを押す。すると機械がニットを編み始める…。この画期的なシステムが、世界のプティックで稼働する日が間近に迫っている。世界のファッション界に革命を起こす男・島正博。その先見性と執念で、夢を編み上げた。

軍手から セーターを発想

一本の糸で立体的に編み上げられるニット製品を「ホールガーメント」という。縫い目がなく裁断・縫製も不要、先進国のファッション

ン業界の救世主となる可能性を秘める。アメリカの新聞は「産業革命に匹敵する大発明」とまで評価した。

世界を驚愕させた大発明は、和歌山県の地場産業軍手から生まれた。(株)島精製作所を創

クモに教えられる…

昭和二十二年秋、焼け跡のバラツクだった。十歳の島はクモの巣を見つめていた。クモはかかっ

た虫をつかむと、再び真ん中に戻る。島は気がつく。どこに餌が来ても真ん中に戻るのが一番の近道なのだ。原点に戻る全体が把握でき、さらにその先も見えてくるという。誰にも教えられず、そのことに気づく観察力が、やがて天才発明少年を誕生させた。

日本初のゴム入り手袋編み機で特許を取ったのが十六歳。「原点に戻って工夫すれば、特許など毎日でもとれる」と島の発明は加速した。音のでない下駄！緩みにくいポルト！ハンドルを回すとそれに合わせて向きを変える車のヘッドライト!!

二十四歳で会社を立ち上げ、手袋の全自動編み機を完成させる。妻の和代が当手を振り返る。

ひらめいたアイデアをその場で図面にするため、社内のおちこちには方眼紙が用意されている。島曰く「なんでも口で説明するより絵や図面の方が早いし正確」。

ニット機械メーカーの(株)島精製作所には、ファッションデザイン部門もある。写真は昨年行われたファッションショーの様子(左)。とそのフィナーレ(下)。



「そのうち階段が動くようになる、玄関が勝手に開くようになる…、夢物語ばかり語っていた島には「近い将来実現する技術」が見えていたようだ。

コンピュータとの 運命の出会い

クモが真ん中にいるように、島

も常に真ん中から全体を見回す。そんな中で、コンピュータと編み機の相性の良さに気づく。0と1の二進法は編み目の「あり(1)」と「なし(0)」の組み合わせである編み機に活用できる！七八年には早くもコンピュータ編み機を完成、九五年には、「ホールガーメント」に到達した。その道筋は決して一直線ではなかったが、あの日の発明少年はフル回転だった。

和歌山から 世界を見据える

世界のアパレルメーカーはいま「ホールガーメント」を競って導入している。ベネトンが、グッチが、アルマーニが…。昨年末に和歌山の本社で開いたホールガーメントのファッションショーには、全世界のファッション関係者が駆



同社の製品は産業機械とは思えない淡い色が特色。島は「汚れが目立ってばお客さんがこまめに拭くため、機械の調子も良くなる」と説明する。

※ホールガーメント
一体化したホール・衣服(ガーメント)。コンピュータで制御され、無縫製・立体的に編まれたニット製品のこと。商標登録されている。

つけた。

顧客の九割は海外。和歌山での事業展開に不利はないのか。島はいう。「関西国際空港までわずか三十分。和歌山は海外への情報発信、事業展開にはむしろ有利な地ですよ」。

最近の島について再び和代から。「寝ていたと思ったら、がばつと起きて枕元の方眼紙に何かメモしてあるんですよ。若い頃とホントに同じ(笑)」。

そのDNAが衰える気配はまったくない。(敬称略)

世界初の全身麻酔手術に成功 華岡青洲

はなおかせいしゅう
(1760-1835)

現在の和歌山県紀の川市で医者の家系に生まれる。ヨーロッパでのエーテル麻酔の成功にさかのぼること50年、1804年に世界初の全身麻酔の手術に成功した外科医。

京都で古医方とオランダ外科を学び、古来中国に麻酔という概念があったことを知る。郷里・紀州に戻って開業し、約20年の研究の末、トリカブト、チョウセンアサガオなど8種類の薬草による麻酔薬の動物実験に成功。後は人体で試すだけという時、母と妻で人体実験に踏み切り、母の死、妻の失明を乗り越えて全身麻酔薬「通仙散」を完成させた執念の人でもある。その後乳がんなど様々な外科手術を行い、教を請う多くの医師にその技術を惜しみなく伝えた。紀州藩の御殿医に、という申し出を「病に苦しむ人々を助けたい」と断ったことでも知られる。

